

## 第三代アーガイル公爵のハイランド経済改革

田 中 秀 夫

### I アーガイル家

本稿でとりあげるアーチボルド・キャンベル（Archibald Campbell, 1682-1761）は、初代アイレイ伯爵（Earl of Islay, 1706年から）、および第3代アーガイル公爵（Third Duke of Argyll, 1743年から）を名乗った大物政治家で、公爵が提供したパトロネジ（恩顧）はスコットランド啓蒙を育むにあたって大きな役割を演じたことが知られている。公爵の甥であるビュート卿も、ジョージ3世の寵臣として首相に抜擢されて、スコットランド啓蒙知識人を庇護した。

アーガイル家はスコットランド最大の氏族、キャンベル氏族中の最有力の家系であった。積年の課題であったイングランドとの合邦は、スコットランドの世論の反対を押し切って、ついに1707年に合意に達し、エディンバラに置かれていたスコットランドの議会は廃止され、スコットランドはその代わりにウェストミンスター議会の議席を獲得した。上院に16、下院に45である。議席は選挙で争うことになったので、おのずと党派対立が生まれることになった。

最大の党派対立は、西部ハイランドを拠点とするアーガイル家とその他の「スクアドロン」（squadrone）の対立という形をとった。スクアドロンは、初代ロックスバラ公爵ジョン・カー（やモントローズ公爵、トゥイードデール侯爵など）が率いる党派であったが、合邦期にあっては、コート派とカントリ派とは区別された第三の党派として力量を持っていた。彼らが合邦を支持したために合邦は成立した。彼らはイングランドの「ジャント」と連携し、ウィッ

グ主流派となっていた。アーガイル家の第2代公爵とともに、第3代公爵は、ウィッグでありながらも、合邦（1707年）後のスコットランドの政治的支配権をスクアドロンと敵対しつつ<sup>1)</sup> 掌握し、政府の代理人——事実上のスコットランド国王——として活躍した。ロンドンにいることの多かった公爵に代わって、スコットランドにあって、その腹心として活躍したのは第2代公爵にあってはカローデンのダンカン・フォーズ（Duncan Forbes of Culloden）であり、第3代にあってはスコットランドの愛国者と同名の甥、アンドルー・フレッチャー、ミルトン卿（Andrew Fletcher, Lord Milton）であった。

第3代公爵アイレイは、選挙ではジャコバイト派も利用しつつ、50年あまり（1707年から13年、1715年から61年の間）に渡って貴族院に議席を持ち、1725年から1742年にかけてはウォルポールに仕えて、また1746年から1761年にかけてはヘンリ・ペラムの政権と関係して、スコットランドの利益とウィッグ政権の利益を調停しよう努めた。1756年に王座裁判所の首席裁判官に任命されたウィリアム・マリ（William Murray）がマンズフィールド卿として貴族院に入るまで、スコットランドはアイレイが代表した<sup>2)</sup>。

アーガイル家の権力基盤は、島嶼を含む西部ハイランドに広がる広大な所領にあり、その実権は15、16世紀以来のステュアート家への貢献によって盤石となった。しかしながら、17世紀の革命期の動乱はステュアート家の運命に甚大な影響をもたらすとともに、アーガイル家の運命にも変化を生み出したのであった。開明的な貴族であったアーガイル家は、絶対主義的なステュアート家と次第に対立するようになるとともに、またより急進的な盟約者（Covenanters）とも一線を画して、ウィッグ的立場を次第に明確にして行った。

こうして、アーガイル家は、とくに第3代アーガイル公爵は、反ジャコバイト、穏健派支持の立場から、イングランドと合邦し、名誉革命の成果をスコッ

1) Shaw, John Stuart, *The Political History of Eighteenth-Century Scotland*, Macmillan, 1999, p. 31. 以下 Shaw とのみ表記。

2) Shaw, p. 95.

トランドにも受け入れ、近代化、文明化を推進しつつあった18世紀中葉のスコットランドの国家体制を支える要の位置につくこととなった。いまや彼の権力はサー・ロバート・ウォルポールとの交友の産物でもあった。1740年代まではスクアドロンとの権力闘争は終焉していなかったが、彼は前述のように、1725年から42年の間、また1747年から1761年の間、ブリテン政府に代わって（政府のスコットランド担当大臣として）スコットランドの政治を指導し運営したのであった。

エマースンは、アーガイルは正当に評価されてきたとは言い難いとして次のように述べている<sup>3)</sup>。「ある者は、彼を国民的利益にそむくイングランド化したスコットランド人に過ぎないとし、また他の者は、彼はたんに選挙に長けたお雇い政治家に過ぎないと見なした。彼に興味深い建設的な政治家を見る者はほとんどいず、多くは彼を狡猾で貪欲だと考えた。イングランドの歴史家にとっては、彼はマイナーな人物に過ぎず、スコットランド人にとっても、彼は改良家として、また恩顧を配分した政治家として、関心を引いたにすぎない。」

政治体にとって権力者がどのような人物であるかということは、政治体の運命にしばしば決定的な影響を及ぼす。とくに国家理性の指令のもとに生存を追求せざるを得なかった近代国家にあっては、主権の行使を委ねられている為政者の決断は国家の存亡をさえ左右した。アーガイル公爵が国家の存亡に関わるほどの決断をしたかどうかは未だ定かでないが、18世紀中葉のスコットランドの運命にとって重要な役割を果たしたことは否定できない。ケイズが語った合邦の完成にアーガイル公爵は深く関与していたように思われる。

文明化 (Civilization) の推進と社会的社会 (Sociability)、公共的社会空間としての市民社会の形成が望ましい価値であるとするなら、名誉革命と合邦という大きな変革を経て商業社会・市民社会の形成に進んでいった大ブリテンの

3) Emerson, Roger, "Catalogus Librorum A.C.D.A., or, The Library of Archibald Campbell, Third Duke of Argyll (1682-1761)" in *The Culture of Book in the Scottish Enlightenment*, Thomas Fisher Rare Book Library, University of Toronto, 2000, p. 13.

18世紀は幸運な時代であった。そこには意図を超えた事物の幸運な成り行きがあった。文明化は富裕、市場経済と結びつくことによって、中間階級を成立させるだけでなく、下層階級の生存条件の改善をもたらす。厳しい格差によって隔てられ、氏族・部族共同体間の関係が敵対的であった封建社会には、中世都市（Burg, Burgh）を別にすれば、安定した市民社会・公共的社交空間は存在しなかった。

スコットランドは合邦によって大ブリテンの一角を形成し、次第に社交的文化を基調として持つ文明社会となる。社交的文化は戦乱とは相容れない。商業的であれ、政治的であれ、社交的文化の普及は平和な社交空間の拡大に寄与するであろう。合邦はスコットランドの運命に大転換をもたらした。そこには事物の幸運な競合があった。一つの要因がなかったら、運命は違っていただろう。例えば、ジャコバイトがもっと強力であったら、スコットランドの歴史は明らかに違ったものとなっていたであろう。

ステュアート家の専制君主が君臨したスコットランドは、文明化が抑圧され、自由な公共世界の形成は阻まれるか、遅れたであろう。スコットランド啓蒙が穏健派の思想傾向と一体であったというシャーの見解が正しいとすれば、そうした体制のもとではスコットランド啓蒙は生まれなかったであろう。

合邦が強行されたこと、それに反対する民衆の多数派とジャコバイトが抑圧されたこと、開明派が政治的支配権を掌握し、名誉革命後のイングランドのウィッグ政権と連携した権力機構が形成されたことは、スコットランド啓蒙の背景として重要であった。スコットランドの権力機構がアーガイル公爵という人物を見出したことは、偶然とは言え、幸運であった。ミルトン卿、ケイムズ卿といった人物がいたことも偶然であったが、彼らなしには、スコットランドの繁栄も、啓蒙も考えられない。

さらに遡れば、スコットランドはカルヴァン派の流れを汲む長老派の国であり、独自の文化的伝統をもつ国である。ケルトの遺産もあり、軍事的精神も旺盛な国であった。17世紀には盟約者の運動が激しく展開された。ステュアート

家への愛着も強く、したがって、名誉革命で断絶したステュアート家の復位を唱導するジャコバイト (Jacobite) の勢力も強力であった。反ジャコバイトのなかにも、アンドルー・フレッチャーのように、どこまでも独立を堅持しようとする愛国者がいた。

そのような意味では、18世紀の中葉から後半にかけて、スコットランドがまさにヨーロッパ啓蒙の一端を担い、普遍的な啓蒙の価値にコミットする最先端の学問を生み出したのは、幸運な偶然の積み重ねの結果であったように見えるとしても、不思議ではないであろう。もちろん、それはたんに偶然だったのでなく、スコットランドには16世紀のヒューマニズムの定着以来の学問的伝統があって、それが基盤となって、啓蒙思想が育ったという側面もある<sup>4)</sup>から、ある意味では十分に可能性があったという見方もできる。けれども、統治者に開明派が就任するか、保守派が権力を掌握するかは、学問や思想にとっては決定的に大きな影響があるのも否定できない。明らかにアーガイル公爵の権力掌握は文化と思想、学問にとって好都合であった。

本稿は、第3代アーガイル公爵について、その活動の輪郭を明らかにするものである。公爵は有名ではあるものの、そして先駆的な研究がいくつかあるものの、その全貌は必ずしもよく知られているわけではない。最近の研究で多くの事柄が明らかにされてきた。筆者は、そうした最近の研究を踏まえて、公爵とスコットランド啓蒙とのかわりに関心をもつが、本稿では、公爵の活動の一端をまず明らかにするために、公爵が率先して推進したハイランドの経済改革を振り返っておきたい。事柄の性質上、第3代公爵の改良運動が中心であるが、アーガイル家と西ハイランド変革の歴史の概観も行うことになる。

## II ハイランドの経済改革

もともとアーガイル公爵家というのは、スコットランドのハイランド西部を地盤とするキャンベル氏族のなかで最も有力な家系であった。封建制以前の自

4) Allan, David, *Virtue, Learning and the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U. P., 1993.

律した土豪としての氏族の権力は絶大であったが、それはステュアート家への貢献によっていっそう強固なものとなった。ステュアート家は、元来は同輩中の第一人者に過ぎないとはいえ、スコットランドの王室として君臨していたから、王室に貢献するか、反抗するかは勢力を左右する要因として決定的に重要であった<sup>5)</sup>。

ハイランドは、氏族制度 (Clan) と地主支配 (Tacksman)、そして個々の借地人=小作人の耕す地条が入り組んでいるランリグ (Runrig 地条) 制度という土地制度で知られていたが、本来、生産力に恵まれた土地ではなく、むしろ不毛の地が多かった。ハイランドは、16、17世紀まで独立した地域であった。しかしながら、氏族制度は18世紀までに崩壊し、ハイランドも時代の流れに巻き込まれる。キャンベル氏族のリーダー的地位にあったアーガイル家は、代々指導力ある首長を持ち、変革を推進した。

15世紀後半から16世紀にかけては、ハイランドの「不吉」な時代 (daunting) であった。氏族ドナルドが崩壊した。ドナルドはキャンベル氏族の主要な対抗者で、その領地はスコットランド全体の三分の一を越えており、半ば独立王国であった。1607年までに王権の勝利に貢献したキャンベル氏族はマクドナルド (McDonald, ドナルドの息子を意味する) の主要な土地を報償として与えられた。こうしてキャンベルの勢力は増進したが、この過程はさらに進み、初代アーガイル侯爵は、マクリーン氏族 (MacLean) の財政破綻によって、広大なその所領を獲得するに至った。

1700年までにアーガイル家は恐るべきものとなった。地代を得ることができ土地は4倍となり、500平方マイルとなった。アーガイル伯爵の地位は封建領主 (それは権力の重層性を特徴とする封建制において上級所有権をもつものである) であって、アーガイルと西インヴァネス州の族長・地主の大部分を支

5) Cregeen, Eric, "The Changing Role of the House of Argyll in the Scottish Highlands" in *Scotland in the Age of Improvement*, eds. By N. T. Phillipson and R. Mitchison, Edinburgh U. P., 1970. p. 5. 以下、アーガイル家の経済改良の叙述については基本的にこの論文に負っている。以下 Cregeen とのみ表記。

配化に置き、彼らの所領は3千平方マイルに及んだ。伯爵はアーガイルの世襲裁判官 (sheriff) として西部ハイランド地方におけるスコットランド法を体現し、正義の執行に責任を負い、またアーガイルの世襲の将軍として軍隊を指揮した<sup>6)</sup>。

しかしながら、アーガイル家とステュアート家の国王との間にあった長い同盟関係は17世紀の政治的、宗教的危機によって崩壊した。1638年に、内乱の原因となった盟約者と国王の関係の破綻を導いたのは、誰にもましてアーガイルであった。1688年の名誉革命によってステュアート家が排斥され、プロテスタント王位継承が決定したとき、ウェストミンスターでウィリアムとメアリの即位の宣誓式を執り行ったのは、第10代アーガイル伯爵であった。

その結果、アーガイル伯爵は1703年に報償として公爵領を授与された。アーガイル家は教会と国家の新秩序を創出するとともに指導する役目を掌握した。その結果、最終的に、従来のアーガイル家とスコットランドの国王との伝統的な親密な関係が解体したのである。長老派とウィッグ党との新しい同盟関係を結ぶことによって、アーガイル家は、西部ハイランドの実権を握り続けるとともに、中央政府の欠くべからざる代理者としてハイランドのみならずローランドも含めてスコットランド全体にいわば君臨することとなった。

こうして名誉革命後、政府の利害はアーガイル家のそれと相互依存的となった。アーガイル家の忠実な支持がなければ、新政府とウィッグはハイランド地方に影響力を及ぼすことはできなかった。名誉革命政権とアーガイル家の利害は一体となった。

アーガイル家を領袖とするキャンベル氏族がこうしてステュアート家の国王に反旗を翻したことが、敵対する氏族を国王支持に向かわせた。アーガイル家が勢力を拡大し、西部の諸氏族から多くの土地を奪ったために、キャンベル氏族への憎しみと不信の念が伝統と化し、大きな流れとなって、ジャコバイト運動へと流れ込んだ。したがって、ジャコバイト運動はたんにステュアート家復

6) Cregeen, p. 5.

位を意味するものにとどまらなかった。それは、反名誉革命、反ウィッグ、反合邦、スコットランド独立、伝統の継承、反穏健派、反キャンベル、反アーガイル等々の複合的含意をもった運動であった。

やがてウォルポール政権のスコットランド政策を担うことになったアイレイは、スコットランドのジャコバイト貴族・地主に対して穏健となったと言われる<sup>7)</sup>が、それは彼らを抱擁し、敵対させないことが、スコットランドの安定にとって必要であったからに他ならない。

### 伝統社会

伝統的なハイランド氏族社会は、土地の商品化が始まる以前にあっては、基本的に牧畜社会であった。しかし、首長は富の基準を羊や牛の頭数でも、土地の大きさでもなく、氏族民の規模においた。氏族の中核には首長の直系血族、氏族のジェントリがいたが、彼ら氏族長は軍事力を組織する責任を負っていた。士族は軍事的身分であって、勇気・勇敢が価値であり、戦争と家畜の掠奪が生活の実態であった。大陸の戦役に仕事を求めることもあった。牛に関すること以外の手仕事は軽蔑し、農場の仕事は召使と小作人に委ねた。

ハイランドの氏族には戦士以外に平民もいた。氏族長から土地を単独または共同で借り受け、現物地代を払い、労役を提供し、戦時には従軍した。平民も氏族長の末裔であることもあったが、その土地の占有者の末裔に過ぎなかったり、氏族長の古来の同盟者の末裔であったり、逃亡者であったり、様々であった。氏族長には吟遊詩人と楽人が仕えた。彼らの仕事は、氏族の伝統と由緒を伝えるもので、氏族の士気と一体感を持たせるために必要であった。それは高い身分の世襲的役目であった。

氏族長は自律した権力を行使したが、恣意的なものではなかった。土地を配分し、保護を与え、不足を満たし、寛大なもてなしをすることが期待された。ながく維持されてきた友情と相互支援の伝統が驚くべき一体感を生み出してい

7) Shaw, p. 90.



たのである。

このような氏族社会の頂点に君臨したのがアーガイル公爵であった。キャンベル氏族の長であるとともに、軍事奉仕と引き換えに彼から所領の保有を許された多くの家臣の封建領主でもあった。18世紀初頭に5千人が支配下にいた。他の氏族から接収された広大な領地の小作人は、彼を地主と見なしたとしても、他の氏族長の家来であったから、反乱の危険を防止するために、一部にはキャンベル氏族あるいは同盟氏族の植民が送られた。例えば、17世紀中葉に、キンタイア (Kintyre) にはアーガイル侯爵が自らの氏族民だけでなく盟約派の低地地方のジェントリと農民を送り込んでいる。次に第9代伯爵は、マクリーンの土地を接収するに際して、主として自らの氏族のジェントリであった借地人(スコットランドのタックスマン)に広大な土地を委ねた。実際に入植したのは借地人からまたがりをするサブ・タックスマンとサブ・テナントであった。

他の氏族の土地接収は必ずしも成功ではなかった。マグリーン氏族から接収した所領ではキルブライドのマクロッホラン (Mclauchlan) が、祖父の時代から努力したけれども、反抗などの結果、地代をもたらずに至っていないという現状を第3代アーガイル公爵に報告している<sup>8)</sup>。

### III 士族社会の解体と漸次的変革

ハイランドの士族社会は1746年のカローデンの戦場で死んだという通念がある。エリック・クレジーンは、それはあまりに素朴な見方であると言う。むしろイングランドとスコットランドのローランド地方の農業の影響を受けて、ハイランドの古い社会構造は変化したのだと言うのである。言語、習俗、衣服、宗教、政治的感情、商業、季節的移動のような影響は1745年のジャコバイトの反乱以前から働いており、その頂点はかなり後に到来する。

クレジーンの言うように一度の事件ですべてが変わるということはなく、持続的・長期的な変化過程に注目することは重要であるが、しかしながら1746年

8) Cregeen, p. 8.

のハイランド処分、すなわち世襲的裁判権と氏族軍の廃止、ハイランド衣装やバグ・パイプなどの禁止といった「ハイランドの清掃」、法的強制策が決定的な変革の措置であったことは否めないであろう。ハイランドから排除された民衆はローランドやアメリカに移住し、古来の遺制は徹底的に解体を余儀なくされた。

しかし、ジャコバイトの乱がなくても、ハイランドに改良が進まなかったかと言えば、そうではない。すでに17世紀の末までに、アーガイル州ではアーガイル家の働きによって、長老派教会とウィッグ政治が主流となっていた。1745年のはるか以前に、キャンベルの多くの所領においても、マッケンジーの土地においても、新しい経済の様相が見られた。穀物の収穫が乏しいときには困窮したハイランド人の洪水が仕事を求めてローランドに押し寄せた。氏族長は貧しい小作人を年季奉公人としてアメリカ植民地に売ろうとした。1745年以後にハイランドの経済的変革が早まったとしても、それはブリテンと西ヨーロッパが人口増、商工業の拡大、新技術の開発などといった経済的な発展期にさしかかっていたことによる。ハイランドの経済の根底的な変革は、従来の独立性を失って、ローランドの産業の受容にほとんど全面的に従属することでもあった。19世紀の初めまでに牛、羊、羊毛、ケルプ（海草灰）、労働力を南部の都市に供給することが西部ハイランドの特化された機能となってしまった。

広大な土地における人口の減少、古来の農村都市の消滅に伴ったのは、新しい労働移動、新しい村の発生、海岸地域の発展（漁業と海草灰づくり）、農村低賃金労働者の登場であった。氏族長は地主となり、氏族民は借地人となるか、労働者となるか、移民して行った。かつての共同体の感情的紐帯はますます弱くなった。

1773年にハイランドを旅したサミュエル・ジョンソンは記した。「氏族長は、その特権を奪われ、必然的に自らの収入の改善に思念を向けたし、忠誠心を失う分より多くの地代を期待している。」「生まれと身分の力が終るとき、貨幣での優位に由来する以外の希望は残らない。」これは的確な把握であった。ダン

ヴェガンのマクロード (MacLeod of Dunvegan) が財政に逼迫し、より高い地代を求めるようになったのは、1741年に議員となってからであった。多くの氏族長も合邦後にイングランドの政治と社会に巻き込まれることによって、ますます高い地代を求めた。

### インヴェラリー

アーガイル家は先駆的な改良家としてこうした変化の指導者として革命的な役割を果たした。18世紀初頭に農業改良に乗り出した。代々の公爵は1740年までに所領の土地保有条件をまったく変革した。彼らはインヴェラリー (Inverary) にゴシック様式の居城を建設し、公園、庭、森を配置した。新しい町や村を建設し、棧橋や運河を設け、新しい産業を興して、ハイランドの新たな入植計画を推進した。こうしてインヴェラリーは西部ハイランドの変革と「改良」の拠点となったのである。

アーガイル公爵は政治的活動のために通常はロンドンに住み、夏の数ヶ月だけハイランドの所領に戻った。公爵への訪問者は夏の終わりにインヴェラリーを尋ねた。アダム・スミスも1759年の10月初めに、シェルバーン卿の弟であるトマス・フィッツモーリスと一緒にインヴェラリーを訪問したが、公爵に会えなかった。スミスの従弟のウィリアム・スミスは第2代公爵の私設秘書であった<sup>9)</sup>。公爵にはハイランド人の痕跡などはなかった。第2代公爵も、第3代公爵もイングランド化した貴族政治家であった。甥のビュート卿も公爵も通常はロンドンにいて、ロンドンの政治社会の指導者として活躍していた。その点では、彼らはイングランドの貴族政治家とさほど異ならなかったのである<sup>10)</sup>。ウィッグの大政治家よろしく彼らはふるまった。部下として5万人の兵を擁することはアーガイル公爵の偉大さを引き立てたが、5千ポンドの出費は、むし

9) Lindsay, I. G. and Mary Cosh, *Inverary and The Dukes of Argyll*, Edinburgh U. P., 1973, p. 363.

10) Shaw, p. 30.

ろラッセル家、スタンホープ家、ペラム家と対抗するために必要な経費であった。そのためには所領の経営に注意する必要があるためである。

1756年にタイレー (Tiree) の家令に指示して、第三代アーガイル公爵は、借地人は以後地代の一部を紡糸で納めること、借地人が使う女子は勤勉に糸紡ぎに励むことを求めた。公爵と1745年以後の統治関係者たちの関心をしめた「ハイランドの文明化」計画では、遠隔地のリンネル工場の建設と大規模な麻の栽培、家内紡糸とが結び付けられた。精励、儉約、節度(禁酒)の徳がハイランド人に求められたが、公爵たちはそうした経済的な徳がジャコバイト主義や不満に対する解毒剤となるとみなした。怠惰と大酒呑みがジャコバイト主義や政府への不満の温床となるというのであった。

もちろん、こうした徳の奨励には経済的意味もあった。所領の生産性を高めるためには勤勉、真面目で、企業心のある借地人が不可欠であった。それは公爵にも借地人自身にも利益となった。第二代公爵(1703-43)の時には、アーガイル家の所領の借地条件は他の所領のそれとさほど変わらないものとなっていた。そこで第二代公爵は、1710年にキンタイアで、また1737年には他の所領で、公開入札によって借地権を売ることにした。時に代理人となっていたダンカン・フォーブズ(Duncan Forbes, 高等民事裁判所長官)は、借地人に対して攻勢に出て、又借地人を招集して、彼らをこれまでの抑圧、労役から解放して、意欲をもって土地改良に励み、公正な地代を払う者には19年の借地権(一種の所有権)を認めると伝えた<sup>11)</sup>。

#### ジェントルマン・ファーマー

フォーブズは借地人とその部下(又借地人)の間に楔を打ち込んだ。こうしてフォーブズは地代を相当に引き上げるとともに、多くの農場を、ジェントルマン・ファーマーであったもとの又借地人が共同借地人に貸し出すことに成功した。地代は増えたが、借地人の負担は増えず、労務提供(労働地代)は廃止

11) Cregeen, p. 11.

された。こうした変革、したがって氏族制度と隷従制の崩壊が、1745年以前に起こっていた。公開入札制度は18世紀半ばにはしばしば紛争の種となり、無秩序になったので、第三代公爵は、それを廃止して、個別申込制度を導入した。それによって個別的に農場の改良の意欲を持った候補者が選ばれた。

競争原理が確立し、それが地代の上昇を可能にし、農場の改良も進んだ。血縁関係と忠誠は所領経営に影響を与え続けたことも事実であるが、それは制限された。ある者は植民地に移民した。またある者は所領の借地人であり続けた。しかし、彼らはもはや氏族の軍事的指導者ではなく、「ジェントルマン・ファーマー」であった。サミュエル・ジョンソンは氏族の軍事的指導者を消滅していく階級であるとみなし、封建的徳の消滅を嘆いている<sup>12)</sup>。

こうして登場した大規模借地農はローランドとイングランド市場をターゲットとして牛と羊を放牧し、土地改良を進めた。こうした小作人をもたない新しい企業家農民の典型はグレゴースン (Gregorson) やマグレガー (McGregor) のような家族であった。彼らは18世紀の後半にマル島やモーヴァーン島の巨大な土地を手に入れ、交通や家畜の運送の独占権も得たのであって、その結果、アンガス・グレゴースン (Angus Gregorson) は、第5代アーガイル公爵に他の借地人以上の地代を納めた。耕作半分、放牧半分の伝統的な農場に比べて、放牧のみの新農場は人出が要らず、その結果、人口が減少した。

第2代公爵が導入した新しい借地は、直接の借地人を大量に作り出した。公爵は従来の又借地人や弱小借地人に利益を与える者であり、彼らの保護者であるつもりであった。第2代公爵には、子供がなかった。そのためにその分、所領の改良に熱心でない嫌いがあった<sup>13)</sup>。第3代公爵、アイレイは、いっそう熱心な改良家であった。18世紀中葉頃からハイランドの人口は増加し始めた。牧畜の拡大と結びつた土地の需要が増大し、地代が上昇した。ガルヴェラッハ (Garvellach) 諸島の地代は、競争入札の導入によって、1749年の14ポンドか

12) Cregeen, p. 12.

13) Shaw, p. 64.

ら1757年には42ポンドに上昇した。伝統的に対立してきたキルブライドのマクロホラン (McLauchrlan of Kilbride) とガラニッチのマクドゥガルド (McDugald of Gallanich) が競り合ったためである。こうした競り合いがアーガイルの所領では18世紀の終わりまで続いた<sup>14)</sup>。1737年に借地権を得た弱小借地人の半数が20年以内に借地権を失った。キンタイアの5教区の地代は1720年から1779年までに2.5倍になった。この半世紀間に農場の借地人の名義が変わらなかったのは55のうち7に過ぎなかった。

マル (Mull) やモーヴァーン (Morvern) の巨大な放牧地では社会は弱小の貧しい借地人とジェントルマン・ファーマーに分かれた。他方、キンタイアではキャンベルタウンの繁忙を極める港が商業と農業を結びつけ、かつてない繁栄をハイランドにもたらしていたので、中流の借地農民が貧しい借地人と「ジェントルマン・ファーマー」、農業経営者を媒介していた。農業の変革と結合した人口増加は、従来のハイランドでは見られなかった龐大な土地なき階級を生み出した。海外への移民とローランドの工業都市への移住が彼らを吸収した。しかし、世紀末から次の世紀にかけて漁業とケルブ (階層灰) の需要が拡大し、地主は移民を抑制して、彼らを漁師やケルブ職人にしようとした。こうして海岸地域にクロフター (Crofter, 小作人) が生まれた。

#### 競争入札制度

競争の影響は革命的であった。しかし、1737年以降、アーガイルの所領で氏族制度が無くなったわけではない。確かに借地権は不安定となった。マルとモーヴァーンの61農場のうち、1744年から1779年の間に、39の農場が持ち手を変えた。借地人の名義が変わらなかった他の22の農場でも、21がキャンベル氏族の借地人の手にあった。にもかかわらず、1737年以降ほど氏族制度が首長にとって重要となったときはなかった。それはジャコバイト主義が蔓延し、ハノーヴァ朝を覆そうとしていたからである。新しい借地契約の入札で土着の

14) Cregeen, pp. 13-14.

地主がキャンベル氏族に競り勝つことによって、土地を取り戻したことも数件ある。入札に負けたキャンベルの入植者はマルを去って本国に帰ると脅した。公爵家の地主としての新政策が所領の治安と安全を危険に晒しつつあった。統治の安定性と安全までもが危険となった。氏族の支援なしには西部ハイランドの治安と秩序の守護者としての公爵の伝統的な役割は維持できなかった<sup>15)</sup>。

1743年に移り気な兄を継承した第3代公爵は、危機を正しく把握していた。それで公爵は借地の前提として政治的忠誠を重視することにした。公爵は家令に、現政府に叛逆しないという忠誠を誓うことを借地の条件にするように指示した。したがって、1745年のジャコバイトの乱に加担したマククリーン氏族とキャメロン (Cameron) 氏族から借地権を取り上げた結果、キャンベル土族の手に借地権は戻った。彼らは改良計画を進める公爵の協力者となった。公爵家への忠誠心は復活し、土地の囲い込み、植林、苔の排除、家の建築などの改良を進めた。彼らはこうしてジェントルマン・ファーマー、農業経営者となった。

氏族と公爵の一体感が生まれた。1743年からの一世代の間、彼らは幸福な時代を味わった。1746年以後、キャンベル氏族は強力な保護者・庇護者の保護の下に、西部ハイランドにおいて恐れるべき対抗者を持たなかった。彼らは為政者職と供給関係職を独占することによってアーガイルを政治的に支配した。土地は国王ではなくアーガイル公爵から得ていたため、彼らには自由土地保有者のもつ投票権はなかった。氏族内部での姻戚関係によって諸部族の関係は密接となり、所有関係も誠実・正直なものとなった。実業での協力関係、信用の相互供与などでも連帯が生まれた。こうして公爵家を中心として新しい生活様式が広まっていった。新しい様式のカントリ・ハウス、庭園などの飾り物が普及し、様式化した町の家屋、馬車、制服の召使、イングランド風、ローランド様式などは、しばしば破滅的な出費となった。

ジャコバイトは大きな勢力であった。しかしながら、ほんの一握りのキャン

15) Cregeen, pp. 14-15.

ベル氏族しかジャコバイトに組みせず、キャンベル氏族はほとんどがアーガイルを支持した。公爵は彼らに恩顧を通じて十分に報いた。ジャコバイトのマクリーンなどの氏族には、王の忠実な臣民となる余地を残すべく、軍での昇進の道を開けておくというのが公爵の外交的判断であった。部下との関係は政治から経済に及んだ。企業心をもったキャンベル氏族のものはインヴェラリーでの公爵の改良を模倣した。インヴェラリーでの家畜の飼育、農業実践、植樹などでの革新はすみやかにアーガイルの他の所領に広まった。ハイランドの経済的可能性を切り開く新しい企画が公爵によって示され、キャンベル氏族の地主がそれに加わった。製鉄の溶鉱炉で使う製材所が1754年にロッホ・ファインに出来た。インヴェラリーには紡糸学校・紡糸工場が、後にはダグラス・ブリッジに毛織物工場が、そしてキャンベルタウンに捕鯨会社などが出来た<sup>16)</sup>。

#### IV 公爵家の役割変化と衰退

第三代アーガイル公爵は半ば伝統的な氏族長としての役割を依然として果たしつつ、半ばは近代的な地主、企業家であった。しかしながら18世紀の終わりまでにアーガイル家の役割は完全に変化していた。ジャコバイト主義はもはや問題ではなかった。したがって、西部ハイランドを監視する番犬はもはや必要ではなかった。その意味で、第5代公爵は政治的役目から解放された。彼は純粹に経済組織の長として登場した。彼はキャンベル氏族ではなくハイランドの全般的な利害の代弁者となった。公爵家に従順であった古来の家が破産によって滅びたことを1797年に代理人が公爵に伝えている<sup>17)</sup>。

公爵はますますアーガイルを不在にするようになったが、それにつれて家令が最高役人として権威を持つようになった。毎年10月に公爵はインヴェラリーで家令や代理などから所領経営の報告を受け、公爵が指示を与えた。しかし、この指示はごく簡単なもので、家令が大きな裁量権を持ち、政治的権限も持つ

---

16) Cregeen, p. 16.

17) Cregeen, p. 20.



ようになった。45年の反乱を挟んで、マルとモーヴァーンの家令は国情や不満の増大について、公爵のエディンバラの代理人、ミルトン卿と定期的に手紙のやりとりをしていた<sup>18)</sup>。ミルトン卿は公爵の代理人であるとともに、スコットランドにおける政府の事実上の長であった。ミルトン卿は1720年代から1761年までアイレイの部下として活動し、英国亜麻会社を創設したが、また公爵の意をたいして製造業振興委員会とスコットランド王立銀行も設立した<sup>19)</sup>。

1737年のタックスメン制度 (Tacksmen, 伝統的借地人制度) の廃止の後に、かつての借地人の義務とされていた多くの事柄を扱うために、行政が拡張されなければならなかった。そのため、多数の弱小借地人が家令に直属することになった。主要な領地にはそれぞれ別の家令が置かれた。経済発展と農業改革が進むにつれて、彼らの義務はますます多数かつ厳密となった。彼らに与えられる指示はますます長く詳細となり、その内容はますます経済に関するものとなった。第5代公爵の代理人であったジェイムズ・フェリアー (James Ferrier) は、過激な財政改革を導入した。古い家令は身を引き、会計、法、農業実践の技術に長けた新しいタイプの役人が登場した。彼らは土地への権利要求を持たず、アーガイル家との土族的、家族的な紐帯もなかった。1800年以後、5つの家令職のうちキャンベル氏族であったのは一つだけであった<sup>20)</sup>。

公爵は今や所領を儲かるようにする以外の義務を持たなかった。アーガイル家は政治から経済へと進化した。しかし、物語はこれで終らなかった。経済と効率性を愛していた第5代公爵は、また広い人間愛を持っていた。公爵はハイランドが直面していた危機を感じ取っていた。ハイランドの将来が、ローランドの工業に原材料と労働力だけを提供する植民地的領土になるとすれば、産業革命の利益をハイランドに導入する基本計画をも持たなければならぬと公爵は考えた。そこで公爵は解決策として植民を止めさせ、ハイランドの資源を十

18) Cregeen, Eric (ed.), *Argyll Estates Instructions in Mull, Morvern, Tiree, 1771-1865*, Scottish Historical Society, 1964.

19) Shaw, p. 93.

20) Cregeen, p. 21.

分に開発する方策を擁護したのである。そこで公爵は新産業、道路、運河、漁村、その他多数の計画を立てた。新しい牧羊場は毛織物業と繋がれ、難民を雇用するであろう。公爵は、新たに設けられたハイランド協会の初代会長に選ばれた。アーガイル家の新しい役割はハイランド全域の保護者かつ指導者であったが、第5代公爵はほとんど成功しなかった。1820年代にケルブと農産物価格が崩壊し、ハイランドの産業は打撃を受けた。そのときに人口は1750年の2倍となっていた。そのために将来の展望は貧困、飢餓、大量移民であった。ハイランドは、羊の放牧、スポーツ場、減少する人口の土地となり、経済と文化の衰退が不可避であった<sup>21)</sup>。

このような歴史を振り返れば、第3代公爵の時代は、おそらく最も華々しい時代であった。本稿では経済改良に主要な関心を向けた。公爵が力を注いだのは経済ばかりではなかった。公爵は政治の実権も握り、巨大な官職任命権を駆使して、スコットランド社会の基本的性格を左右するほどの影響力を行使したのであった。時代は政治変革の時代であり、また改良と啓蒙の時代であった。公爵とこうした変革、啓蒙とは密接な関係があった。その問題は改めて論じることにする。

---

21) Cregeen, pp. 21-22.